

次の世代に伝えられるのか

語り手 伊藤 又一

沼袋二丁目

僕は今七五歳になるんですよ。原爆が落ちたのは二五歳か二六歳の時ですか、通信兵だったですよ。広島の爆心地から南東二キロくらいの所の皆実町の比治山に、大本営通信隊があつてそこにおつたのです。

八時十分頃、朝礼が終つて兵舎の中に入り、食事の準備中だった。みんな一服しとつた。飯を取りに来いと炊事場から呼びに来るのを待つとつて。各班十人位で、十人分のおみおつけやらご飯をとりに行く、それを居室で待つとつた。

しょつちゅう空襲があつたもんで、またいつものことだと気にもとめなかつた。単機でね。B29と言う飛行機が一万メートルの高度で来たんです。だからまあ、いつもの偵察に来たんだなという感じだね。瞬間、物凄い音と爆風、いつもと違う何か凄いの物を落とされたと思つて外へ飛び出した。(原爆というのは後でわかつたが、当時特殊爆弾と言つた。)

中にいる人は皆、兵舎の下敷になつて死んでしまつた。私は以前軍隊で中国におつた。歩兵隊で戦争の体験があるもんです

から、気がついたら外へ出とつた。動物的本能やね。内地から直接広島に来た人はとり残されて、机の下敷きになつたり、頭を柱に打つたり、同室の人は全員死にました。

ガラスの破片が散らないように、窓にテープを貼つてましたけどね。私も左腕にやけどを負つていて、べろんと皮がむけた。翌日には火脹れで触れると痛いから着物も着ないでいた。汁が出て汚いし、ウジ虫がわいたりする。しかし、それを処置してくれる衛生兵も死んでしまつていない。

近くに船舶部隊があつてすぐに応援に来た。また、呉の方からは海軍が来まして、「元気で動ける者は、一人でも二人でもアメリカをやつつけるためにこい。」と、大変ですよ。女の人でも市民でも竹槍もつて来いというくらいだからね。こんな目にあつてもまだまだ「アメリカの野郎やつたんで」という憎しみの気持ちでいましたね。「原爆なんかにかけてたまるか。天皇陛下下の赤子として国に殉じるんだ。」と。

実際には気力があるだけで、役に立たんもんですね。動けん

ですよ。かたき打ちどころか、比治山でござ敷いて倒れておったから、銃持っては行けなかつたですけど。でも気が張ってたから、一日寝ただけですぐ、死体の処理のために働いた。比治山にはテントがあり、救護所みたいなのができとった。

負傷した市民が、軍隊の所へ行けばクスリもあり何かしらえらると思つて、なだれこんできた。水、水と言つて、阿鼻叫喚。生き地獄でしたね。私は、ちょうどこんなカンカン照りの日で、やけどの傷がひりひり痛かつたけれど、自分のことにかまつていられなかつた。主に同僚たちの死体を集めてガソリンかけて焼いて、骨を国に送つてやらねばとがんばつた。両親がどんなに待っているだろうかと。

これは軍の仕事として統制がとれていて、上に立つ人が「こうせい、こうせい」とピンとしていた。水とか食事とかは軍だからあつたと思いますよ。何食べとつたかね、乾パンかじつたのかな。クスリとかはあつたが、衛生班とか扱える人がいなかったから、なんでもワセリンを塗つとつた。こうして死体整理の作業を一週間くらいやつて、二〇〇三〇名ぐらいの遺骨を故郷へ送つてやつた。

黒い雨？どうだつたかね。とにかく自分が生きることだけで、他のことを観察することなんかできないですね。そう、芋畑があつて、半分が枯れていて半分为青々だね。あれ原爆の放射能があたつてる所だけやられてるんでしょう。何しろ殺氣立つて

ますからね。同僚がやられると、ぞーつとするでしょ。

中国ではね、重機関銃兵だつたですけど、こつちがやらなきややられる、邪魔になるからと、女であれ子どもであれみんな殺しちゃうんですね。異常心理と言うんですかね。

三重県の家族の所には、十月にはじめて帰つた。まだ結婚してなかつたから、責任はなかつた。親戚の人は、もう、広島で原爆にあつて死んでるんじゃないかとあきらめとつた。いろいろ片付けとか、掃除とか、軍の仕事が残つとつたんで。日本人はありがたいね。広島の人みんながね、兵隊さんに応援してくれた。食物とか何か持つてきてね、自分が困っているのにな。兵隊さん元氣になつてくださいと、そういう慰めがありましたね。

僕は奇跡やつた。やけど以外は後遺症もなく元氣にしていた。まわりでは白血球が少なくなつたり、血が止まらなくなつたり、そういう人沢山いましたよ。やけどした後はそうね、十年くらい残つたね。ケロイドまではいかなかつたけれど、十年くらい黒く変わりましたね。爆心地から二キロ以内にいましたからね。運がよかつたつていうか、他の人はみんな原爆症になつとるといふのに。健康診断は年一回受けている。自分も心配だからね。しょうがないわね、広島にいたんだから。大病はしていない。今なんか、何時死ぬかなあなんて（笑い）。

その後結婚して子どもも孫もいる。勿論心配だつた。原爆受

けること、家内には知らせてなかった。広島におつたんだから原爆にあつてゐるだろうとは、うすうす感ずいてたかもしれんが。今はもう知つてゐるけど、口に出しては聞かないし、こつちもしゃべりたくないしね。だまされたと思つとるだろうな(笑い)。

息子の嫁さんもうのに困るやないねえ。原爆かかつてるとね、そんなところへ嫁出す親いせんもんね。就職にはさしきわりなかつた。徴兵前は洋服屋やつたから、またそれにもどつた。神田の店が幸い焼け残つたから、三越や伊勢丹とか百貨店に洋服卸したりして順調だつた。昔、洋服屋の番頭やつていたが、商売柄、要領がよかつたと思う。

昭和十四、十六年中戦争で広東におつた時、始めは重機関銃兵やつたが、やせていて体力使うの無理言うて、ソロバンの腕買われて経理にまわされたりした。原爆の時も、とつきの機転がきいて命拾ひしたのかもしれない。

偏見とか差別みたいなことはあつたね。「結婚して障害が出たら困る」「原爆受けたんだから、いつ死ぬかわからん」「あと何年もつかない」と親戚の人がそう言うつた。

中国では機関銃隊で、ダダダとだいぶ殺したやろか。だからその人の怨みがみんなこつちに……。殺気立っているからね、こつちも。子どもや女性、弱者は殺しちゃいけないと命令はでるけれども、命令どころじゃない。こつちは余計友達が死ん

でゐるのに、そんなこと言つていられるかつて。殺気立っちゃうね。

日本の国民は非常によく訓練されていたね。あの東条さんのお蔭でね。一生懸命に国を守る気持ちが強かつたんだなあ。僕ら若いでしょ。二四、二五つちゅう一番果敢な頃だつた。年代によつても違ひますけどね。僕らの子どもの頃は、大きくなつたら兵隊さんになるのが教育やつたものね。私は飛行機乗りが好きで、少年航空隊になるつもりで志願したりね。しかし、親に怒られて(笑い)。

学校の先生が一人息子だからそれはあかんからつて、家に言いに来たから止めた。昔と比べて今は、教育が違ひますよ。昔は教育ひどかつたからね。けど今の若い人に、国家観念とかそういうものないもんね。国を守るつていう気持ちがね。あのころうけど教育してないもの。

中野には一九四七か一九四八(昭和二二か二三)年から住んでいる。しいの実会には、藤平さんに「中野でも、惨状を次の世代に伝える人が少なくなつてゐる。五〇周年までに体験をまとめて出しましょう。」と誘われ、入つた。心境の変化で、もう孫まで行けば自然消滅みたいなんで、原爆もすたれていきますよ。

もう、今だから堂々と胸をはつて話せる。「あんた原爆やられたんか」「ああ、原爆か、そつだよ。」つて。最初は尋問される

みたいに構えてた。長広会には十数年になる。戦友から目黒もやってる、中野にもあるよとすめられた。女性が多いね。男性は僕と同じで余りしゃべりたくないんだろ。それに会社に勤めとったりして。七〇過ぎで仕事を止め、今は趣味の書道をしたり、悠々自適の生活をしている。

自分の体もだんだん年とって弱くなってくると、人を殺し合わないとか、傷つけないということが、人生で大切なことではないかなと。事構えてね、けんかばかりするのが能じゃないと。世の中冷静になって物が判断できるとね、戦争はやらん方がよいね。こんだけ余計殺して、両方が傷つく。

四、五年前広島を家内と訪れた。ドームしか残っとらんね。忌まわしいことは全部抹殺して、そんなことがあったのかしらんと思うでしょ。「これ、後の方に伝えられるかしら、実際問題として!」「今の子に、どういう風に反映するのかね。」



聞き書きを終えて

伊藤又一さんは、その日、十時のお約束だったのに、九時半に到着した私たちよりずっと早く沼袋地域センターに来ておられました。ご本人は、年だからとおっしゃっていましたが、正味二時間以上にもわたる、私たち三人の質問攻めにお疲れの様子もなく、たんたんと語ってくださいました。最後にもらされた「本当に後世に伝わるかしら」と言うお言葉、長いこと懸案の被爆者援護法も棚上げされた今日、実感として胸に迫るものがあります。

微々たることでしょうが後世に伝えたいがために、酷暑の中、お互いに語る方も聞く方もやってきました。今後とも、これを書き残すだけではなく、生の声をお聞き出来た者の責任において、個々にPRしていこうと思うのです。

田 中 満 子

川には死体が浮かび、馬は立ったまま死んでいるという広島
の惨状を、とつとつと語ってくださった伊藤又一さん。中国で
の従軍体験にふれたときは、伊藤さんのお顔につらそうな表情
が浮かんだように感じました。いやな体験や思いだしたくない

ことまで、ひとつひとつついでにねいに私たちの質問に答えてくだ
さったこと、心からお礼を申し上げます。伊藤さんのお話
を聞いて、「戦争とはどんなものか」ということが、私の頭のな
かで少し明確になったような気がいたします。

S・H